論文審査要旨及び担当者
報告番号　甲　乙　第　　号　　氏名　宮丸　裕二

論文審査担当者

主査	慶應義塾大学文学部教授 文学研究科委員、D.Phil.	松田　隆美
副査	慶應義塾大学文学部教授	河内　恵子
副査	ケント大学英文学部教授 Ph. D.	マルカム・アンドリューズ (Malcolm　Andrews)

論文題目　’Art for Life’s Sake : Victorian Biography and Literary Artists’

宮丸裕二君による博士号請求論文、’Art for Life’s Sake : Victorian Biography and Literary Artists’は、英国ヴィクトリア朝期に書かれた伝記についての論考であり、中でも「作家による作家についての伝記」を文学研究の見地から考察するものである。エリザベス・ギャスケル (Elizabeth Gaskell) によって書かれたシャーロット･ブロンテ (Charlotte Brontë) の伝記､ジョン･フォースター (John Forster) によるチャールズ・ディケンズ (Charles Dickens) の伝記、そして、アントニー・トロロプ (Anthony Trollope) によるウィリアム・メイクピース・サッカリ (William Makepeace Thackeray) の伝記を取り上げて、それぞれ、小説作品、他の伝記作品、自伝作品といった、ジャンル上隣接する諸作品との比較をとおして考察を進めている。伝記の対象となっている作家はいずれも 19 世紀イギリスを代表する小説家であり、また伝記を執筆した作家もヴィクトリア朝の小説文学への深い関わりを持つ作家群である。本論文は、ヴィクトリア朝において、伝記という執筆形式が同時代の作家と作品の双方に対して果たした役割を文学史的に明らかにすると共に、ヴィクトリア朝文学理解の基盤となる、伝記によって形成された人生理解の枠組みを提示することをその目的としている。

論文は、序論と結論を含めて５つの章から構成されている。

Introduction	A Mixture of Traditions Building the Context of Literary Art
Chapter 1	Novelizing the Lives : Comparison between the Biography and the *Bildungsroman* in Gaskell's *The Life of Charlotte Brontë*
Chapter 2	Nothing Fictional in Fiction : Authorship and Authority in the Biographical Relationship of Dickens and Forster
Chapter 3	No Explanation, No Life : The Conflict between Romantic Genius and the Victorian Virtue of Self-help in Trollope's Accounts of Thackeray and Himself
Conclusion	The Life Context Seizes the Throne from the Literary Text

〈論文の概要〉

序章では、伝記というジャンルのヴィクトリア朝期以前の展開を辿りつつ、本論の論点を導き出している。17 世紀に成立したとされる伝記ジャンルであるが、実はそれ以前の時代に見られた文体や修辞に多くを負っている。歴史と文学との狭間に位置するゆえのジャンル的二重性も、既に伝記ジャンル成立前に意識されていたものを引き継いだ結果であった。また、18 世紀に一度成熟を見た伝記ジャンルが、ヴィクトリア朝期に変容して行く過程で無視できないのは、海外の自伝的文学、－特にスペインのピカレスク小説とドイツの教養小説(Bildungsroman)－の影響である。こうした自伝的ナラティヴは、時には事実を伝えるものとして、また時には虚構化された小説として書かれたが、それはヴィクトリア朝期の自伝文学と小説文学の双方に強い影響を与えた。さらにその間接的な影響を受けて、伝記文学もまたヴィクトリア朝期に至って、自伝文学に見るような極めて政治的な自意識を備え、また小説文学を特徴づけるドラマ性を獲得するに至る。ヴィクトリア朝期の伝記は、多くの読者を獲得しジャンルとしての隆盛を見た。そしてその結果、社会における個人への注目度を高め、各種の人生のパターンを供給し、また現代へと続く批評や文学研究の原型を作り出したのである。この伝記ジャンルは、同時代の人々の人生理解の枠組みを広く形成し、また伝記作家自身のそれを反映している。そうした特徴に注目し、現在では、伝記ジャンルを文学テクストとして批評する傾向が顕著だが、本論文もその批評姿勢を引き継ぐ形で、以下の章で具体的な作品を分析している。

第１章は、伝記に見られる小説的なドラマ性について考察するべく、エリザベス・ギャスケルによる伝記『シャーロット・ブロンテの生涯』 (*The Life of Charlotte Brontë*) を、小説文学との比較の中で論じている。特に教養小説

(Bildungsroman)の形式と比較対照させることで、教養小説のプロットの借用や小説的に連鎖する論理性を明らかにし、教養小説執筆への意欲を持っていたギャスケルが、小説的な物語に沿うかたちで事実を配列し記述したものが本作品であることを指摘する。そうした小説的な人生理解法は、『シャーロット・ブロンテの生涯』が人気を博したことで、ヴィクトリア朝時代の多くの人に共有され、当てはめられることとなる。その結果、知に貢献する偉業をなした作家とそれ以外の人々の人生が、あるいは伝記に書かれる人生と書かれない人生との価値が、互いに等価なものとみなされるようになり、知がストックされる場所が、芸術作品から人物そのものへと推移していったと結論づけている。

第２章は、ヴィクトリア朝期を代表する人気小説家チャールズ・ディケンズの伝記を対象として、伝記作家と伝記の対象となった作家との間に存在する複雑な相互依存的関係を論じている。伝記作家ジョン・フォースターは、ディケンズが没した翌年の 1871 年から 1874 年にかけて、伝記『チャールズ・ディケンズの生涯』(*The Life of Charles Dickens)*を出版した。フォースターとディケンズはどちらも下層中産階級の出身で、生涯を通じて親交があった。フォースターは弁護士の資格も持ち、当時の文壇の中心的存在であり、作家という職業が社会的尊敬と権威を勝ち取るのに大いに寄与したが、同時に、ディケンズを含む同時代の作家達に強い影響力を持っていた。『ピックウィック・ペーパーズ』(*The Pickwick Papers*)や『荒涼館』(*Bleak House*)などの小説作品を通じて、法の権威の歪みを社会的に問題としてきたディケンズにとって、フォースターは、自分の作品が必要とする社会的権威を付与してくれる存在であると同時に、同じその権力によって、自作を非公式に検閲しうる、アンビバレントな存在であった。この複雑な関係はディケンズが自作の成功により権力を獲得した後も基本的に変わることなく、フォースターの見解は、ディケンズが自分自身について語る内容にも影響を及ぼし続けたのである。その一方でフォースターも、ヴィクトリア朝期を代表する人気小説家ディケンズの伝記作家となることで、自らの権威を高め、人々の尊敬を勝ちとろうとしたのである。

フォースターとディケンズが保持した権力は、その性質も立脚点も異なる。フォースターの権力とは、法や文壇の権力に代表される権威 (authority)であり、一方ディケンズの場合は、著述家としての人気に裏打ちされた作家の権益(authorship)である。本章は、両作家が、交流と著述を通じて、互いに他者が持っているものを求め続けた点を具体的に示し、彼らの執筆の多くが、権力関係の中で自他を位置付ける試みであり、それゆえに政治的な自意識に基づいていると解釈している。ディケンズの指名によって書かれ死後すぐに出版されたフォースターの『チャールズ・ディケンズの生涯』も、まさにそうした文脈に位置づけられる。すなわち、伝記は当時の権力関係を記録する媒体であると同時

に、政治的な権力闘争の場そのものであったのである。そこには作家同士が影響し合い、互いの著述内容を規定し合うことから生ずる、主体の交錯が看取される。

第３章は、第１章と第２章とで論じられた、小説から借用するドラマ性と強い自意識から生じる政治性という二つの観点を応用して、トロロプによって書かれた伝記『サッカリ』 (*Thackeray*) と、トロロプ自身の『自伝』 (*An Autobiography*)とを比較対照して論じている。トロロプはヴィクトリア朝時代の小説家の中でも特に多作であったが、『自伝』はその遺作となった。一方『サッカリ』は、ディケンズと並んで人気を博した小説家サッカリ(William Makepeace Thackeray; 1811-63) の人生を描く、作家による作家の伝記である。本論文はその中に対立する価値の混在が見られると指摘する。すなわち、ロマン主義の生んだ「天才」という概念と、ヴィクトリア朝の時代風土が生んだ「自助」の美徳とが混在しており、また、伝記執筆の伝統という観点から見ると、ジャン=ジャック・ルソー とベンジャミン・フランクリンから互いに相反する伝統を引き継いでいると論じる。自己の天才を否定するトロロプは後者を前面に押し出すものと捉えられがちであるが、実はロマン主義的天才への羨望から脱却できてはいないのである。トロロプは『自伝』においては、そうした自意識をある程度隠蔽することに成功しているが、しかし他者を描き出す伝記においては必ずしも成功していない。自意識や政治性から自由なところで描こうとした『サッカリ』において、サッカリはむしろロマン主義的な天才として位置づけられている。トロロプは、自ら否定したロマン主義的作家像に、人生の理解の枠組みとしては大いに依存していたのである。しかし両作品には、人生を通して構築した芸術の評価が、その人生を正当化し意義を持たせる手段になっているという視点が共通して認められる。芸術が、その背後にある作家の人生の意味づけのための要因として機能するというこの状況は、ヴィクトリア朝という時代とその文学を特徴づける重要な特色である。

結論となる章では、ヴィクトリア朝時代において最もメディアへの露出度が高く、伝記的記述の対象となると同時に、自らもベストセラー作家としての顔を持つヴィクトリア女王に触れ、最終的な結論を引き出している。女王の人物像は、さまざまな伝記記述を通じて伝えられ、国民の多くは敬いうる君主として彼女を受け入れていた。ここでは、芸術の役割は人物像そのものの重要性に対して二次的なものとなっている。すなわち、伝記の発祥当初においては、作品としての芸術が人知の最上のものであり、芸術家自身も芸術家の人生を記した伝記も二次的なものであったのに対し、ヴィクトリア女王の伝記においては、人物ないしその人生が人知の体現として最重要視され、芸術作品はむしろその反映と見なされて、二次的な参照物になっているのである。伝記の記述の方法

とその物語性を辿ることで、最終的に「たしなみとしての芸術」の勃興と、背景にすぎなかった人物像が最重要視され、前景化されてゆくという現象が立ち現れてくる。芸術作品に文脈を与えるに過ぎなかった芸術家の人生は、伝記というジャンルの流通と変質を通じて、芸術創作の動機においても、また人間の知性の置き所としても、コンテクストであることをやめテクストそのものとなったのである。本論文は以上のように結論づけて、ヴィクトリア朝期における伝記文学の展開に明確な輪郭を与えている。

〈審査の要旨〉

以下、2006 年 1 月 13 日（金）に行った口頭試問の質疑応答もふまえつつ、審査委員会の所見を要約する。

宮丸論文は、ヴィクトリア朝時代における伝記、自伝、小説の相関関係についてのバランスのよい理解に裏打ちされた、綿密な分析に基づいた独創性の高い論文である。本論文は、自己形成が重要な関心事であった時代において、伝記が自己のアイデンティティの探求と操作のためにいかに活用されたか、そしてそうした過程を通じて伝記のジャンル的な不安定性がいかに解消されていったかについて、重要な問題提起をおこなっている。実際、伝記は流動的なジャンルであり、小説をはじめとする様々なかたちの弁明(apologia)のテクストとの区分は決して明確ではない。本論文は、伝記作家にとって使用可能であった、様々な既存の文学ジャンルや、19 世紀文学における流行や外国文学の影響関係を明確にした上で、作家がそうした素材を用いて、いかなる伝記を作り上げたかを、結論の章も含めて 4 つの具体例を通じて論じている。結果として、本論は、個々の伝記について、伝記作家と伝記対象者、あるいは伝記と小説との間の関係性を明晰に分析するだけでなく、ヴィクトリア朝期の伝記発達史を描き出すことに成功していると言える。

序章では、ヴィクトリア朝期の伝記文学が、様々なジャンルの混成として成立した過程が簡潔に論じられ、論文全体の前提となる視点が提示されている。本論の議論は、ヴィクトリア朝期以前において伝記の地位が低かったという前提に立脚しているが、この主張は基本的に容認できるとは言え、さらなる証拠をもとに論じる必要があったであろう。すなわち、19 世紀以前の伝記的ジャンルの発達に関する記述は、対象が広範囲にわたるためやや具体性を欠く。特に聖人伝に関しては十分な記述がなされていないが、しかしこの長い歴史をもつジャンルと伝記との創作プロセスおよび構造上の比較は、伝記研究に新たな視座を提供する可能性を持つ。

第１章から第 3 章は、ヴィクトリア朝において広く読まれた３つの具体例を個別に分析することで、伝記ジャンルの機能と構造の多様性を描き出すことに

それぞれ成功しているが、なかでも第 2 章は、最も完成度の高い章である。宮丸君は、これまでの研究によって培われたディケンズに関する深い知識を十分に活用して、ディケンズとその伝記作家フォースターの間の複雑な相互依存性を、権威(authority)と著者の権益(authorship)とをキーワードとして描き出すことに成功しており、その議論の独創性は審査委員会が一致して高く評価する点である。

また第 3 章は、トロロプによるサッカリの伝記と自伝とを詳細に比較して、両者の傾向の違いを対比的に示すのみならず、その背後には、それぞれルソーとフランクリンとに遡れる、2 つの伝記叙述の伝統があることを明晰に論じている。トロロプに着目した慧眼は評価できるが、トロロプの作品量の多さを考慮するならば、本論の議論はやや断定的な印象を与える。興味深い課題であるため、宮丸君による今後のさらなる研究が望まれる。

本論文は最終的に、ヴィクトリア朝時代における伝記文学の発展と人気は、読者にとっての作家と作品の位置を、最終的に入れ替えることとなったという結論に帰着している。この結論は文学史的に見ても意義深い指摘であり、また最後の具体例として、伝記作品の対象作家としてのヴィクトリア女王に着目した視点は極めて有効である。

以上のように、宮丸論文は完成度の高いヴィクトリア朝時代の伝記研究であるが、審査委員からは、さらなる発展の可能性がいくつか示された。

本論はヴィクトリア朝時代において多くの読者を得た３点の伝記について、独創的な分析を展開している一方で、その議論を周辺からサポートすべき伝記の実際の流通に関するデータの少なさを露呈している。当時の中産階級にとって重要な読書手段であった巡回図書館の蔵書や貸し出しに関する記録なども活用し、具体的なデータで分析を跡づければ、説得力はさらに増したであろうと思われる。また、本論文によって示されたヴィクトリア朝期における伝記文学の展開が 20 世紀文学にどのように引き継がれたのか、特に、作者の伝記と作品との関係性の変化が、20 世紀の批評の方法論の構築へとどうつながったのか、本論の視点と結論を高く評価する読者としては、さらに興味を持つ点である。結論において伝記と文芸批評との関係性への視点が示唆されていれば、論文はさらなる発展性を獲得したであろう。また、論文の英語の文体には、さらに推敲をする余地が若干あることもあえて指摘しておく。

以上のように若干の課題が残されたが、それらは本論文の視点の独創性と議論の深みを損なうものではない。本論が描き出したヴィクトリア朝時代における伝記文学の展開の図式は、１９世紀イギリス文学の理解に大きく寄与すると思われる。かくして審査委員会一同は、宮丸裕二君の博士号請求論文を、博士号（文学）を授与されるに相応しい論文であると判断する。